

# 精神文化学会 第11回 学術大会

日時:令和3(2021)年8月22日(日)12:45 開場

会場:オンライン開催(zoom)

## 大会テーマ「仕事論」

- 13:00-13:05 開会挨拶 理事 岡田晋亮
- 13:05-13:30 基調発題 会長 近藤 剛
- 13:30-14:20 特別講演 理事 永松道晴
- 14:20-14:30 intermission
- 14:30-14:45 第12回総会 司会 庶務幹事 海老名宜陽
- 14:45-14:50 intermission
- 14:50-16:05 研究発表 第一部(仕事論)
- 16:05-16:10 intermission
- 16:10-17:00 研究発表 第二部(自由枠)
- 17:00-17:05 閉会挨拶 専務理事 徳田季晋

## 発表プログラム

### 基調発題

13:05-13:30 近藤 剛(京都産業大学 教授)

### 「仕事の精神史——日本思想史からのアプローチ——」

日本の思想に見られる仕事の精神史を辿ってみたい。例えば、日本の「勤勉」思想はウェーバー・テーゼに類似した展開を見せる。つまり、仕事は単なる生産や労働のレベルから、社会貢献のレベル、さらには宗教的救済のレベルへと深化していくことが指摘される。仏教の経済倫理が近世の近江商人の経済精神の成立に影響を及ぼしたとする説や、日本資本主義の伝統が鈴木正三や石田梅岩の思想に見出されるという説などがある。鈴木正三は仁王禅の提唱者で知られるが、『四民日用』で在家の職業倫理を説き、四民が各階級の天職に対して勤勉に専心することが仏業になると説いた。つまり、「仏業即世俗業」というテーゼであり、これが日本における仕事の精神史を貫いていると考えられる。

## 特別講演

13:30-14:20 永松道晴(株式会社インテグレード 代表取締役社長)

### 「仕事師を目指すあなたへのアドバイス」

私は 60 年の仕事人生の殆どを海外との貿易業務に費やして来た経験から、西欧と日本社会との間には文化的に仕事に関する考え方に根本的な違いがあることを体得した。英語には workaholic ワーカーホリック 仕事中毒を意味する単語があり、日本語には英語には無い「仕事師」という言葉がある。茶道や剣道など日常慣れ親しんでいる道に通じる「仕事道」を究めようとする人のことだ。世界的なブラザーメーカー ワコールを立ちあげた京都の故塚本幸一氏との出会いで私が学んだことから、サラリーマンとして経験したこと、さらにその後独立創業して過ごした日々を通じて私が働いて来た経験を話して、仕事師としての道を究める為のヒントをまとめた。益々国際化する社会でコミュニケーションを豊かにする英語の能力と企業の健康診断が出来る分析能力、どんな業務に就くにせよ、この二つがあなたを成功に導く鍵となるスキルだ。そして最後に仕事師として私が得た報酬について触れる。

## 研究発表 第一部

14:50-15:15 溝浦健児(自営業)

### 「分断社会における仕事の意義」

人は何故、働くのであろうか。小中学生から高校生、そして大学生など、学業が本分である者達を除く、大多数の人々にとって、仕事や職業は、自らのアイデンティティであるとさえ言えるだろう。もちろん、ただ生きていくために、もっとはっきり言うならば、ただお金を稼ぐためだけに、自身の時間と労働力を切り売りし、特に仕事へのこだわりや思想・信条なども無く過ごしている人もいるだろう。グローバル化とデジタル化に邁進する現代社会は、前近代社会、否、一昔前と比べてさえ、複雑怪奇に過ぎる。そもそも、同じ国に暮らす人間達の間でさえ、視覚化が困難な、無数の階層や障壁が存在しているように感じられる。それを痛感させられたのが、新型コロナウイルスの世界的流行と、地球規模で展開されている米中二大国による、熾烈な覇権争いだった。置かれた立場によって、見える景色が全く違うのだ。

15:15-15:40 能村晋平(愛知県庁学事振興課 主事)

### 「AI 時代の仕事論」

これからの仕事の在り方を考えるとき、AI との関係性は不可分といえる。2013 年、アメリカで発表されたマイケル・A・オズボーンの「未来の雇用」という論文には、アメリカの雇用の約 47% がデジタル化による危機、つまり AI によって代替されるとあったことから世界の人々に衝撃を与えた。それに付随する形で我が国でも野村総合研究所が日本の労働人口の約半数は AI やデジタル機器で代替可能と発表し、「AI に仕事を奪われる」という危機感が醸し出された。事実、我々の日常業務や日々の暮らしの中で、デジタル化することで便利になることや、効率化されることは多くある。しかし、「仕事を奪われる」という視点から AI に対して危機感を抱き、「AI に負けない」ような教育をするというのは疑問が残る。我々は AI と協働すべきであり、AI の恩恵を経済的な面に留めることなく、AI によって生まれた余暇をいかに有意義に使うかという議論が必要なのである。

15:40-16:05 與賀田光嗣(日本聖公会 司祭)

### 「キリスト教教育における仕事論について」

私の現任校の進路は大学進学、専門学校、就職と多岐に渡る。一般にキリスト教系の高校は大学進学を前提としており、働くということについて現場レベルで神学的に主題化される機会は少ない。キリスト教教育に関わる一人として、「働く、労働、仕事」についてキリスト教の伝統と共に考えたい。ヨハネ・パウロ二世が社会回勅『働くことについて』(1981)を發布してから二十年、世界はその予見以上に変動を見せた。効率化が追求され、人間は「非人格」的に扱われている。来るべき第四次産業改革の前夜において、私たちはどのような視座を得るべきか。パンデミックにおいて、テクノロジーに集積される全体主義の端緒を垣間見ている私たちにとって喫緊の課題でもある。そこで本論では、A・リチャードソンの古典的名著『仕事と人間』を紐解き、「働くこと」における倫理と、「人間とは何か」という問いかけへの応答を探りたい。

## 研究発表 第二部

16:10-16:35 藤井翔太(京都産業大学 学生)

「日本の死刑制度は今後どのように変わるべきなのか

——世界的な死刑廃止への動きを受けて——」

近年、死刑制度は世界中で徐々に「廃止」の方向へと向かいつつあることもあり、日本国内でも研究者や弁護士の間では死刑廃止を求める声が増えている。一方、「死刑制度はやむを得ない」と容認する人々は80.8%を超え、廃止派は21世紀に入って以降継続して10%未満という結果になった。反対派の主張として度々挙げられるのが、①殺人犯の人権、②抑止力の問題、③冤罪の危険性である。反対派の言い分は、一見すると全くの正論のように思える。だが実際はそれほど単純ではない。たとえば、国家が殺人犯を殺すことを否定するならば、殺人犯が罪のない人々を殺害することも否定せねばならない。冤罪にしても、死刑がなくなったところで依然なくなりたくないのだから、死刑をなくすよりも冤罪の原因を断ち切る方が重要ではないのか。以上を踏まえると、巷に溢れる死刑廃止論の多くはどこか理想論的であるように思えてならない。発表では、日本における死刑制度の将来について、刑罰としての死刑という観点から考察する。

16:35-17:00 秋田丈瑠(京都産業大学 学生)

「ハイデッガー『芸術作品の根源』の素描」

『存在と時間』の著者として知られるマルティン・ハイデッガーは後年、芸術や詩に強く関心を抱き、思索を続けた。『芸術作品の根源』は、もとは講演であるが、彼の芸術に関する思索の口火を切るものであり、また彼の思想の「転回」を予示するものとしても知られている。その内容は従来の芸術論をも転回し得るものであり、芸術作品は「世界と大地との闘争」によって「真理を生起」させるといふ、単に「美」に依らない芸術論を展開する。そしてあまつさえ、「すべての芸術は……その本質においては、詩作である」というのである。しかし、彼の文章はその独特な語彙や言い回しのため極めて錯綜しており、そのままでは理解が困難である。芸術論に関するアクチュアルな議論を行いやすくするためにも、この著作についてできる限りの素描を試みたい。